

二〇一七年九月の「森三郎の作品を読む会」では、戦後もっとも初期のものとされる「城下町」を読みました。

「城下町」は一九四六（昭和21）年、「季刊新児童文化」復刊第一号に発表されました。『森三郎童話選集 かささぎ物語』（刈谷市教育委員会編、一九九五年）の酒井晶代氏の解説に次のように述べられています。

作品は、刈谷をモデルにしたと思われる地方の城下町を舞台に、父方と母方の家同士の反目、大人たちの間で揺れうごく少年の心情をとらえたもので、「赤い鳥」記者時代のリアリステイックな作風を受け継ぐものと言える。背景には、維新から昭和へ、古風な雰囲気を残す小さな城下町が工業都市へと変貌する様子が描かれ、三郎の故郷に対するおもいが感じられる。

これは「森三郎刈谷市民の会」メンバーとしては是非読みたい作品です。国立国会図書館所蔵の「季刊新児童文化」から本文を取り寄せて、読むことができました。

藩校文禮館が学制の頒布で廃止され、お城山の下に亀城小学校ができたこと、お城山の谷が埋められて、生徒の遊技場ができたことなどは、刈谷の歴史と重なっています。

その頃の話は、森三郎も子どもの頃から聞いて知っていたことでしょう。しかし、兄・銚三の著作の中のところどころで同様の描写を見ることがあります。たとえば「亀城校創立六十年記念誌」（昭和十年三月）掲載の「白壁の校舎」（『森銚三著作集続編』第十五巻）に書かれている、毎朝始業の五分前に打たれる旧藩当時の陣太鼓のこと、「学校生徒は何ならふ 弁当叩いて、箸習ふ」という歌や、木を割りぬいて作った太鼓型の弁当箱のことなどは、三郎が「城下町」の素材にしただろうと思われる箇所です。

そして主人公の宗之助が小学校へ上がった時には校舎も新しい木造の二階建てになっていたこと、校長先生の作詞の校歌ができたばかりのころだったということから考えると、この宗之助は森三郎と同年代の少年です。亀城小学校の校歌ができたのは大正六年、作詞は高須鈍吉校長、作曲は幾尾純で、三郎が小学校に入学した年です。

作曲者の幾尾は明治43年に東京音楽学校を卒業後東京で尋常小学校代用教員を経て、明治44年奈良女子高等師範学校附属小学校に訓導として赴任していた人です。あまり詳しく知られていなかったからでしょうか、『城下町』では、作曲者を宗之助の早くに亡くなったお父さんの弟という設定にして、お父さんとよく似ているというおじさんを慕う宗之助の気持ちがよく描かれています。

このおじさんが小学校の先生になって、宗之助は書方と唱歌を習うことになりました。ところがある日の昼休みに友だちとお城山まで行って、鳥の巣を見つけて夢中になっているうちに、学校の方から唱歌の声が流れていることに気づくという失敗をしてみます。これは『赤い鳥』昭和8年10月号の「杉でつぼう」（名義：佐久間吉彌）で読んだ話です（「かささぎ通信」第36号）。違うところは、「城下町」では「こんど出来た、私たちの学校の校歌」として亀城小学校校歌の詞がはつきり出ていて、青くなつて教室に戻る宗之助たちの緊迫感がよく表されているところです。話を聞いたおじさん先生が新しい曲を教えてあげようと、「鳥の巣」の曲を板書する部分も付け加わっています。これは「赤い鳥童謡集第八巻」（大正14年）所収の北原白秋作詩、弘田龍太郎作曲の本当の曲です。森三郎のユーモア精神が顔を出しているところです。

「城下町」の後半は、10月の「読む会」に続くことになりました。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日）に刈谷市中央図書館で開催

11月10日（金）午後1時半～3時半

森銚三・森三郎と小泉八雲

森銚三「小泉八雲」『偉人暦』と『赤い鳥』昭和2年6月号